

論文の内容の要旨

論文題目

現代台湾における官製歴史叙述：
中国革命史観と台湾本土史観の連続的理解に向けて

氏 名

若 松 大 祐

現代台湾において国家は歴史をいかに書き、そもそもなぜ書いてきたのか。それは自らの統治を正当化するためである。国家が主な統治範囲を中国から台湾へ変更すると、国家が書く歴史の範囲も中国史から台湾史へ変わった。にもかかわらず、どうして今なお中国史をも書くのだろうか。本研究は、現代台湾において官製歴史叙述が半世紀間にわたり示してきた新旧の歴史観を、前後に連続するものとして理解する試みである。

そもそも、国家が世界の潮流（グローバルな論理）と在来（ローカル）の潮流（ローカルな論理）との順応を背景に民主を自任し、自らの統治の正当性を主張するのは、現代世界に散見する現象である。ただし台湾の場合、在来（ローカル）の潮流には、等身大で台湾規模の論理を使わず、歴史的な事情のために中国規模の論理を使い続けている。ここに現代台湾史の特徴があり、この故に、台湾は政治の重心が中国から台湾へ移っても、中国規模の歴史を書き続けるのである。

さて現代台湾史とは、1945年から現在までの台湾の歩みであり、そこには中華民国を名乗る政治実体が事実上の主権国家として自律している。現代台湾は半世紀の間に政治の重心を中国から台湾へ移した。現代台湾を対象にする多くの研究は、この現象を台湾化または本土化と呼び、政治、経済、社会、文化などの様々な側面から検討を加えて、現代台湾史を理解しようと試みてきた。つまり「台湾化とは何か」という問いが、現代台湾史研究においては基礎的かつ重要な議題なのだと言える。

そして先行研究が説明した台湾化とは、かつては主人公の変化（中国人から台湾人へ）であり、後に政治体制の変化（権威主義から民主主義へ）となり、近年は憲法の変化（臨

時條款から増修条文へ）である。いずれも現代台湾において台湾と中華民国という二種類の主体を想定しており、二元的な歴史像を持っている。確かに台湾における現実政治が台湾か中国（中華民国）かを争点にし、展開してきた側面はある。しかし、両者はいずれも民主を自任して統治の正当性を確保することを目指しており、ここに台湾政治が半世紀にわたり一貫して直面した重要な議題はあった。つまり、現代台湾の歩みには、いわば台湾と中華民国という二種類の射手が共に追求した民主という的があるのだから、私たちは時として一元的な歴史像を想定してもよからう。

そこで本研究は台湾化を、半世紀に及ぶ中華民国産の民主理念（つまり「我々の民主」）の変化（陣営から、憲政、選挙を経て、憲法へ）として理解する。その際、「我々の民主」の変遷を考察するために、時々の「我々の民主」の正しさを基礎づけてきた同時代の「我々の歴史」（官製歴史叙述）に注目する。こうして、官製歴史叙述が持った中国中心史観から台湾中心史観へという半世紀間の展開を連続的に把握することが、本研究の目的となった。

官製の歴史叙述とは、近代の国民国家が国民の総意として提示しようとする「我々の過去、現在、未来」であり、国民が国民共通の課題に取り組んだ来し方行く末として公示される物語である。本研究は、中華民国の代表を自任する総統が公示した著作、告辞、声明、遺囑などを、「我々の歴史」の現れた史料とみなす。特に毎年の元旦や国慶節に発表する告辞は、分量も短く一年ごとの変化も見えにくいものの、実は数年や十年のスパンで眺めると、大きく緩やかな変化が立ち現れてくるのである。更に、こうした史料を国家の自伝（「作者-話者-登場人物」が同一であることを読者と約束する文章）として位置付け、とりわけ話者に即して考察を進める。

「我々の歴史」は半世紀間に渉り、世界の潮流と在来の潮流の双方に適うものとして民主を自任し、成り立っていた。しかもこの二つの潮流を架橋し結合するものに三民主義が充てられる。つまり「我々の民主」は、東西冷戦を背後に持つ世界規模の「冷戦の論理」と国共内戦を背後に持つ中国規模の「内戦の論理」という二系統の論理で、基礎づけられていたのである。歴史が民主の意味を決定し、また民主が歴史の内容を選抜し、つまるところ歴史叙述と民主理念は相互影響関係にあった。現代台湾において国家が説いた「我々の歴史」は、次のような二段階の時系列的展開を持ち、重心が中国から台湾へ移っている。

第一段階（1949年から1978年まで）は、主に中国全土の主権を主張するため、「我々の歴史」が説かれる。中華民国は1950年代において、国共内戦を東西冷戦に置き換えており、そこで描かれたのは東西冷戦的な革命史だった。世界史の民主潮流（そして民主陣営）の中に「我々」があると説く内容である。1950年代後半になると、米ソ二極対立が揺らいだこともあり、戦場を東西冷戦と国共内戦とに区分する発想が出てくる。ここで国共内戦的な革命史が法統として、つまり憲法（民主の象徴）の制定過程である憲政史として登場する。革命の内容は、武力から総力戦へ移り始めるのだった。総力戦は精神や文化を重視し、1960年代半ばになると、民主の起源は中国古典に求められ、中華五千年の道統が「我々の歴史」となり、これを承けた三民主義が現在の台湾で仁政を展開するというふうに説明さ

れる。こうして民主を在来の潮流（中国史の脈絡）から準備したことで、中華民国は1970年代に国際的に孤立しても、仁政の現われとして民主憲政を推進し、民主を自任し民主陣営を守るとまで言えた。ここでの民主憲政とは、選挙民主主義ではなく、自由基地と呼ばれた台湾での国家建設全般を意味する。かなり変則的であるものの、住民の広範な参政が実現されていたとも考えられる。

ところで第一段階の時期に、中華民国は台湾を大陸反攻の拠点として正当に統治するために、台湾と中国の歴史的に密接な関係を説いている。ここに台湾史研究の源流の一つがあった。

第二段階（1979年から現在まで）は、主に台湾の統治権を主張するため、「我々の歴史」が説かれる。統治の主目的が中国から台湾へ移ったのは、1979年元旦の米華断交のためである。1980年代、中華民国は中華民国憲法の護持を根拠に、表向きは相変わらず中国全土の主権の保持を叫ぶ。そのため、法統すなわち民主憲政史が描かれる。ここで想定された法統が1950年代や1960年代に想定された法統と異なるのは、中華民国が台湾で遂げた成果への注目であり、これが後の中華民国在台湾という時空の切り取りに繋がった。中華民国が台湾へ来て以降の部分について、法的に根拠づけるのは、1990年代においてである。その際に、憲法の改訂や選挙（元首の直接選挙）の実施によって、戒厳令下の権威主義体制を旧い時代とみなす時代区分が登場する。中華民国在台湾の新しい時代に生きる人間が、新台湾人と呼ばれた。とりわけ台湾に生きるという点を重視した陳水扁は、「我々」が「台湾の子」であり、台湾島四百年史の最先端で、民族自決や主権在民という民主を達成できたと主張した。他方、同じ中華民国在台湾でも、中華民国、特に中華民国憲法を重視した馬英九は、孫文の理想（民主）が台湾でこそ開花したと主張し、中華民国百年史を描いている。以上のような二段階で、中国革命を中心にする歴史観は、台湾本土を中心にする歴史観へ展開したのである。

中華民国は国際空間で自律して生き抜くために、民主を自任し統治の正しさを主張し、それを「我々の過去、現在、未来」から基礎づけてきた。しかも、ここで展開された説明は、何通りにも読める可能性を残すという巧妙さが備わっている。例えば国共内戦を東西冷戦に置き換える説明、民主の起源を中国古典世界に求める説明（蒋介石時代）、台湾は中国統一のために大陸の発展を待っている間、国際的にあるべき地位を持つと主張する説明（李登輝時代）などがある。かかる説明を、中国国民革命史、中華五千年史（道統）、中華民国在台湾史がそれぞれ背後で支えていた。

中でも注目すべきは、中華民国民主憲政史（法統）を背景にして、中国統治の主張を台湾統治のための担保にする説明（蔣経国時代）である。つまり中華民国は1979年の米華断交以降、主目的を中国統治から台湾統治へ移した際、中国規模の主権を前提にして台湾規模の治権（統治権）を確保しようとしたのだ。李登輝も馬英九もこの説明を使って現状維持（中国からの独立でもなく、中国の統一でもない状態の維持）を採る。この説明を具備したが故に、中華民国は台湾規模で自律する主体に事実上（de facto）は成り、法理上（de

jure) は完全には成れない。途中、陳水扁はこの説明の使用中止を図るも果たせなかった。

要するに、現代台湾における国産の民主理念は、官製歴史叙述と影響しあっており、それが持続する様子は、漸進的な台湾化と呼びうる過程であった。現在という結果から見れば、現代の台湾は等身大をはるかに上回る中国規模の中華民国という統治の枠組みを使い、自国の存在を内外に黙許させてきたことになる。それ故に、現代台湾の巧妙な立ち居振る舞いには、一方で国際空間において自律し生き抜こうとする姿がある。この抜け目なくそして活力ある姿は、これまで見過ごされがちであった。同時にいま一方で、周知のとおり、現状維持という実のところ止めるも続けるも困難な状態がある。現代台湾の逞しさと悲哀はここに窮まる。